# 英語の構造言語学的体系性について


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-03-24<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 守屋, 哲治, Moriya, Tetsuharu<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24517/00065766 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 英語の構造言語学的体系性について

守屋　哲治

# Structural Linguistic Systematicity in the English Language

MORIYA Tetsuharu

## １．はじめに

言語学と言語教育のつながりについては，教授法の変遷とそれをバックアップする理論の推移との関係で論じられることが多い。しかし，ある教授法が否定されると，それに付随していた言語理論も全体として否定され，そこで明らかにされた知見なども忘れさられていくという傾向が見てとれる。本論文では，主として，英語教育の中ではオーラル・アプローチと結びつけられることの多い構造言語学を例にとり，その特徴がどのような形で英語の体系性を特徴づけているかについて述べ，構造言語学の知見が現在の英語教育においても重要であることを論じるものである。[1]

まず，英語教育の文脈ではあまり詳しく述べられることのない構造言語学そのものの特徴およびこの枠組みによって見えてくる言語的事実について概観する。

それを踏まえたうえで，構造言語学が理論的背景にあるとされるオーラル・アプローチに対する批判を検証し，その批判がオーラル・アプローチそのものに向けられているというよりも，オーラル・アプローチのなかで用いられるパターン・プラクティスなどの機械的練習に向けられていること，また，言語学習がパターン・プラクティスのみで行われるかのような前提に立っているかのような批判であり，構造言語学の概念自体が否定されているわけではないことを確認する。

そのうえで，構造言語学的に特徴づけられる英語の性質をどのように英語教育に活かしていくかについて述べていく。

## ２．構造言語学とは

構造言語学の基本的考え方は，言語は外界を区分する記号体系であるというものである。たとえば色彩語彙を例にとると，色彩語彙が表す色は，光のスペクトルの連続体であり，それ自体に区切り目は存在しない。しかし，色を言語で表現する際には,「赤」「青」「白」のように色の体系を区切って表すことになる。そうなると,「赤」という記号の持つ意味は,「青」や「白」ではないということであり,「赤」という記号自体に何か意味があるということにはならない。言語には，このようにもともと区分が存在しない対象を，有限の記号によって区分するという性質がある。そのような働きをする記号自体には本質的な意味はなく，他の記号との相対的な関係で意味が決まっているにすぎない。記号のこのような性質を恣意性（arbitrariness)といい，構造言語学の父といわれるソシュールは恣意性を言語記号の特徴として挙げている（ソシュール 1972)。

言語がこのような性質を持っていることを前提に，複数の個別言語を比べてみると，当然のことながら，言語ごとに外界の区分の仕方が異なっていることがわかる。兄弟姉妹に関する語彙を日本語と英語で比較してみると日本語では,「兄」「姉」「弟」「妹」の４語が存在し，年齢の上下および性別で区分されている：

令和３年10月１日受理

**表１．日本語の兄弟姉妹の区分**

| | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 年上 | 兄 | 姉 |
| 年下 | 弟 | 妹 |

それに対して，英語では年上・年下の区別はなく，男女による区別のみが存在している：

**表２．英語の兄弟姉妹の区分**

| | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 年上 | brother | sister |
| 年下 | | |

もちろん英語においても年上，年下の区別をすること自体は，elder や younger などの形容詞を用いることで可能である。ここで問題にしているのは区別が可能かどうかということではなく，言語によってはある区別が語彙化されているのに対して，別の言語では語彙としてその区別が固定化されていないという事実である。さらに，インドネシア語のように年上・年下の区別のみが語彙化されている場合や，韓国語のように年下から年上を指す際には語彙が細分化されているのに対して，年上から年下を指す際には１語で済ませるというような場合もある。

言語が外界をどのように区分するかの違いが見えやすいのが上述したような語彙の意味の場合であるが，同じようなことは音についても当てはまる。英語の sit ［sit］と set ［set］は別の単語であるが，これは[i]が[e]と異なる母音と認識されることに由来する。日本語でも「息［iki］」と「池［ike］」が別の単語と認識されるのはやはり母音[i]と[e]が異なる音と認識されているからである。しかし，日本語母語話者にとって英語の hat ［hæt］と hut ［hʌt］を識別するのは難しい。それは日本語の母音体系においては[æ]と[ʌ]は異なる音と認識されず，「あ」の音としてひとくくりになってしまうからである。このように言語ごとに「どのような音が存在するか」というのは異なっている。このような言語ごとの音体系を扱うのが音韻論（あるいは音素論）という分野である。

さらに，文法についても構造言語学的な特徴がみられる。英語では「過去形」と「現在完了形」が表す意味の違いをどのようにとらえるかについて種々説明がなされてきた。Quirk et al.（1985：190）では the present perfective signifies past time ‘with current relevance’と述べられている。つまり，現在時点以前に起こったことであっても，それが現在時点と何らかの関わりを持っていると考えられる場合に過去形ではなく現在完了形が用いられるとしている。一方，日本語では「ル」形と「タ」形の対立は存在するが，この対立が時制（tense）として過去・非過去の区別を表しているのか，相（aspect）として完了・非完了の区別を表しているのか学者によって意見が分かれている（金田一（1976），寺村（1984），安藤（1985））。これは日本語が英語のように時制と相を明確に区別した体系を有していないことに起因していると考えられる。この体系性の違いを構造言語学の観点からどう分析することができるかについては４．３で述べる。

以上のように語彙的意味・音・文法といった言語の多様な側面において，構造言語学的な特徴づけが有効性をもっていることがわかる。すなわち，言語は語彙・音韻・文法などさまざまなレベルにおいて，構造上の対立の上に成立っているということを構造言語学は捉えようとしていたのである。このようなことは英語の教職課程に設けられている英語学の授業の中でも標準的に扱われている事項であり，構造言語学的な観点自体は決して時代遅れというわけでなく，言語の本質を理解するのには欠くべからざるものと言ってよい。

次節では，このような構造言語学的な言語観をベースにした言語教育理論であるオーラル・アプローチについて紹介したうえで，オーラル・

アプローチに対する批判について検討する。

## ３．オーラル・アプローチ

### 3.1　オーラル・アプローチとは

オーラル・アプローチとは C.C.Fries や Lado らによって 20 世紀の半ばに提唱された考え方であり，Bloomfield らの構造言語学と Skinner らの行動主義心理学を理論的基盤としている。

伊藤（1982: 81）によれば，オーラル・アプローチの特徴は,「言語体系における構成要素としての pattern の対立関係を外国語の学習指導のいろいろな面に意図的に利用した点にある」とし,この特徴が「教材編成の際の音声や文型，文法事項といった言語材料の選択，配列についてだけでなく，音声や文型，文法事項の指導技術についても，新しい視点を提供している」と述べている。

教材編成においては，pattern の対立を音声，文型，文法事項の配列に活用し，実際の指導においてもその pattern を無意識に身に付けさせるための pattern practice，mim-mem（mimicry memorization）などを用いることによって pattern の対立を内在化する指導法を提案している。

また，実際の使用データに基づいた記述文法を用い，使用する文も実際に話されている言葉を使用するなど,言語は speech であるという構造言語学の立場が反映されている(佐野 1995)。さらに，言語学習は overlearning であり，言語を構成する構文の集合体を関連付けて習熟させ，自動的に口から出せるように繰り返して練習することによって習慣形成していくものとされた。この点については行動主義心理学の考え方が土台になっているとされている。

### 3.2　オーラル・アプローチに対する批判

上で見たように，オーラル・アプローチは構造言語学の基本的な言語観である構造的対立の関係を習得できるような工夫をしているという点がその特徴と言える。オーラル・アプローチについてはどのような批判があったのかを，理論的基盤と方法論に対する観点から見ていく。

#### 3.2.1　Noam Chomsky による理論的基盤に対する批判

構造主義言語学および行動主義に対して言語理論の面から批判を展開したのが，生成文法の創始者である Noam Chomsky である。

Chomsky（1959)は，Skinner（1957)について，行動主義心理学の個々の概念を取り上げながら，言語現象を刺激-反応で説明することの問題点を指摘し，言語の性質を明らかにするためには認知的な機構の解明が必要であることを主張している。

また，Chomsky（1964)は，言語研究の本質は，有限の知識で無限の文を生成することができる機構の解明にあるとした。構造言語学は言語の表面的な分類・記述に終始しており，そのような機構の解明には至っていないとして，生成文法理論の優位性を主張している。言語研究の対象が表面的な構造ではなく，その構造を生み出す仕組みであるという Chomsky の主張が，生成文法理論の広まりとともに広く受け入れられていき，言語研究の枠組みとしての構造言語学は衰退していった。

しかし，言語学を言語教育の基礎科学として見た場合，言語構造の体系性に関する研究は言語の性質をとらえる際に大きな貢献をしてきたのは事実であり，構造言語学が指摘してきた言語の体系性自体が否定されていたわけではない。また，生成文法理論が言語教育の基礎理論となる可能性については Chomsky 自身も懐疑的である(伊藤 1982: 107)。また，生成文法を基盤とした新しい外国語学習指導法は提唱されていない。現在の生成文法は，言語の構造や体系自体よりも，高度に抽象的な一般化を追求していることもあり，現在の言語教育理論に対して生成文法が理論的基盤を提供しているとは言えない。Chomsky の批判というのはそのような観点から

の再検討が必要である。

### 3.2.2　オーラル･アプローチの方法論に対する批判

オーラル・アプローチに対する批判には，パターン・プラクティスに関連したものが多い。パターン・プラクティスはオーラル・アプローチの一部を成すものであるが，教育現場では，パターン・プラクティスに重点が置かれ過ぎていたことがその原因と考えられる。

具体的な批判としては，単調な繰り返しで生徒たちが飽きやすい，状況に適した項目を選択する能力が身につかず，実際のコミュニケーション能力の育成につながらない，などが挙げられている（Richards & Rodgers 2014，和泉 2009)。

しかし，これらの批判はオーラル・アプローチの一部分が特に取り上げられてその全体，ひいてはその基盤となる言語理論自体が間違いであるような印象を与えているきらいがある。

パターン・プラクティス自体は現在も，何からの形で実施されている場合が多い。その中でパターン・プラクティス自体が本質的に間違った方法というよりは，そのやり方を工夫したり(語学教育研究所　1998)，指導の中での位置づけを考えたりすること(齋藤 2015,井上 2017)などにより，言語の体系性を生徒に身に付けさせるための手段としての有効性は十分に発揮できると考えられる。伊藤（1982: 95)の以下のような指摘は，現在の英語教育を考えるうえでも十分参考になるものである：

「Oral Approach の特徴である pattern の学習があまりにも強調されすぎると，外国語学習における言語学的側面の偏重という弊に陥る危険があるが，これは決して Oral Approach の考え方の本質的問題ではない。Oral Approach の特徴である pattern の学習が学習指導の過程全体の中に適切に位置づけられてこそ，その特徴の現実的な価値が生まれてくるのである。」

## ４．英語に見られる構造言語学的体系性

前節では，構造言語学の全体的特徴を概観したうえで，オーラル・アプローチに対する理論的批判が必ずしも構造言語学が主張する言語の体系性自体を否定するものではないこと，方法論に対する批判が，体系性を身に付けさせようとする全体像よりは，その一部分であるパターン・プラクティスに向けられがちであることを見てきた。本節では，英語の体系性について具体的な事例を取り上げていくことにより，その理解がたとえ潜在的なものであったとしても言語学習に重要な役割を持ちうることを示す。

音・語彙的意味・文法の体系性について取り上げるが，いずれの場合にも英語と日本語との体系の違いという観点から説明し，日本語母語話者の英語学習との関わりについても言及する。

### 4.1　音体系

音は物理的には，音波であり，それが耳に到達して脳を通して知覚されることで言語によるコミュニケーション手段として用いられる。音波の物理的特徴は連続的に変化しうるものであるが，２節でも述べた通り，ある音が別の音と「同じ」か,「異なる」のかは個別言語ごとにその体系性が異なっている。この体系性の違いに潜在的にでも気づくことは，外国語学習における音の識別，発音などにおいて重要になる。

本節では，日本語と英語で音体系の相違がはっきりと見てとれる事例をあげ，外国語学習との関連性についても論じる。

筆者が大学で担当している英語音声学の授業で，pen という単語を例に，気づきにくい日本語との発音の違いを説明することがある。語尾の[n]に着目すると,これは舌先を歯茎につけて鼻から息を抜く音であるのに対して，日本語の「ペン」の語尾の音は，舌の後部が口蓋の奥にある口蓋垂に接する音で国際音声記号では[N]と表記される異なる音である。日本人の多くは pen を発音する際に，無意識のうちに語尾の音を[N]で発音しているが,その事に気づいていな

い。

このようなことが起こる原因が日本語と英語の音素体系の違いである。構造主義言語学の時代に発展した音素論では，音素を「意味を区別する最少の単位」と定義し，音素記号を/ /で表し，[ ]で表す音声記号と区別した。英語では thin [θin]と thing [θɪŋ]が違う単語となる。すなわち歯茎鼻音[n]と軟口蓋鼻音[ŋ]はそれぞれ別々の音素/n/，/ŋ/を具現していることになる。一方，日本語では「芯（しん）」という語を，[ʃiN]と発音するのが通例であるが，仮に[ʃin]と語尾を歯茎鼻音で発音しても，[ʃiŋ]と軟口蓋鼻音で発音しても，やや不自然に聞こえはするが，別の語に聞こえるということはない。つまり日本語では[N]，[n]，[ŋ]などは意味を区別しないので同一音素の異なる具現形（異音）となる。このような体系性の違いがあるため，日本語母語話者は日本語の体系で意味の区別をしない異音を別々の音として認識しておらず，pen の語尾の音が「ペン」の語尾の音と異なることに気づかないのである（守屋 2021）。

このように英語において区別があるのに日本語では区別しないという形の音素体系の違いは，他にも長母音と二重母音の対立（例： bought [bɔːt]と boat [bout]），有声唇歯摩擦音と有声両唇破裂音の対立(例:van [væn]と ban [bæn]，[r]と[l]の対立（例：red [red]と led [led]）など多く見受けられる。このような体系の違いを発音や聞き取りにおいて意識させることは，発音自体の向上はもちろんのこと，リスニング力をあげるためにも重要になる。パターン・プラクティスによってこれらの対立に注意を向けること自体は必要であり，会話などのコミュニケーション活動を中心とした授業においても取り入れることは十分可能である。

### 4.2　語彙的意味の体系

構造言語学的な意味のとらえ方として，意味の場の理論（semantic field theory)がある。これは，語はその関連する意味の場を分割しており，それぞれの語の意味は他の語との相対的な関係で決まるという考え方である。2 節で取り上げた，兄弟姉妹に関する語彙も意味の場を形成している例である。日本語と英語では，意味の場の分割の仕方が違っていて，相対的な語の意味が異なっている。

このような意味の場の分割の違いは，母語だけでは気づかない新たな世界観を与えてくれることがある。日本語では，「人間や生物が生まれてから死ぬまでの，生存の持続」という意味の「いのち」，その「いのち」を持って日々営む「生活」，そして日々の生活の積み重ねによって送る「人生」は，それぞれ別の語になっており，これらの語が表す概念に連続性を感じることはない。しかし，英語では life という語が「いのち」，「生活」，「人生」の意味をカバーしていて，これらの意味の間に連続性を想定することが可能となる。

また，意味の場の分割の仕方が，その言語の背後にある文化的価値観を反映していると考えられる場合もある。日本語では，稲作に関連した語として，「稲」「籾」「米」「ごはん」「ライス」などがあるが，これらは英語では rice の 1 語でカバーされる。逆に英語では「牛」に対応する一般語として ox が存在するものの，bull（雄牛），cow（雌牛），bullock（去勢した雄牛），calf（子牛），steer（雄の子牛），heifer（雌の子牛）など多くの下位語が存在している。このような違いは，日本における稲作文化，英語圏における牧畜文化の重要性と関連している（安藤 1985）。

意味の場の理論に関する語彙研究は，身体部位や親族用語などの分野で活発に研究されていたが，名詞に限ったものではない。

國廣（1981：31)は，日本語の「見える」，「見る」と英語の see，look の対応関係を表 3 のように示している：

**表３．日英語視覚動詞の意味領域の違い**

<table>
<tr><td>ミエル</td><td rowspan="2">see</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ミル</td></tr>
<tr><td>look</td></tr>
</table>

「見える」と「見る」は命令形で用いられるか否かで，異なる振る舞いをする:

(1)　a.　*見えろ!
　　b.　　見ろ!

(1b)は容認可能な命令文であるが，(1a)は通例容認不可能である。これは，命令文に用いられる動詞には行為を自らの意志で行うことが可能であるものに限られるという制約があるため，非意志的な動作を表す「見える」がこの条件に当てはまらないからである。英語の see と look にも意志性の有無の違いが当てはまるとされているが，実は see は命令文に用いられる場合がある:

(2)　a. Come and *see* what I've found.
　　b. *See* page 124.

國廣 (1981: 31)

このような事実から，國廣 (1981: 32)は「見える」と see が重なっている領域を「対照がまったく受動的に目に映っている状態」，「見る」と see が重なっている領域を「対象を意識的に目でとらえる動作」，「見る」と look が重なっている領域を「対象を特に注意力を集中して目でとらえる動作」として，日本語と英語の視覚動詞の体系性の違いを記述している。

別の例として，英語 give に対応する日本語に「あげる」と「くれる」の 2 語があるが，話し手の視点が主語よりである場合には「あげる」が，与格（「に」で表される名詞句）よりである場合には「くれる」が用いられる(久野 1978)。この場合には，英語では意味の場の区別に関与しない視点という概念が日本語の場合には意味の場の構成に関与していることになる。

以上見てきたように，語彙的意味を構造的にみることで，意味をより分析的にとらえることが可能となり，その構造の違いをもたらす要因についての洞察を得ることができる。

このような意味のとらえ方を，外国語教育の現場で直接導入することは考えにくいかもしれないが，指導者がこのような体系性を意識することで，日本における英語の語彙指導であれば，英語の語彙を理解する際に，訳を充てることとその意味を理解することは本来別のことであるということを意識して，語彙の意味の提示の仕方を考える土台となる。

### 4.3　文法体系

文法においても体系的特徴が見られる。特に複数の言語を対照することで，その特徴が見えやすくなる。ここでは，日本語と英語の時制体系を例にあげ，両言語の類似点と相違点が体系性という視点から見えやすくなることを示す。

2 節で述べた通り，英語には時制と相がそれぞれ独立した体系として存在しているのに対して，日本語の「ル」形と「タ」形の対立は，「去年彼に会った」のように時制に対応しているように見える場合と，「今，本を読み終わった」のように相に対応しているように見える場合がある。このような違いを体系性の差として捉えるのに有効なのがReichenbach (1947)の枠組みである。太田 (1977)は，この枠組みを用いて時制・相に関する日本語と英語の体系の違いについて分析している。

Reichenbach (1947) では，発話時点を表す Speech Time (以下 S)，時制要素が指す時点を表す Reference Time (以下 R)，そして，言及されている事象が起こる時点を表すEvent Time (以下 E) 三つの時点を原始要素とし，この三つの時点の相互関係によって時制および相の体系を表している。

Sは，典型的には発話時点を指す。発話時点は発話が行われる場面によって変化するという点で，Iやyouのような代名詞と同様に直示的（deictic）な性質を持つ。Rは時制要素が言及する時点，Eは，述部で表されている事態が起こる時点を指す。時制は定義上，SとRの関係を示すが，単純時制では，RとEは一致するので，以下のように表すことができる。

(3)　a.　S__R, E　（未来時制）
　　b.　S, R, E　（現在時制）
　　c.　R, E__S　（過去時制）

（3a）はR,Eが発話時点Sよりも未来のある時点に同時に位置していること，（3b）はS, R, Eが発話時点で一致していること，(3c)は発話時点よりも過去のある時点にR,Eが同時に位置していることを示している。

また，完了時制はRとEの相対的関係を表すことになる。例えば，

(4) John will have left at 3 o’clock.

ではJohnが出発するのは,未来時制が示す3時よりも以前ということになるので，EはRよりも先行する位置にあることになる。また，Rは未来時制なので，Sよりも後に来る。以上のことを踏まえると，(4)のS,R,Eの関係は（5）のように表すことができる。

(5)　S__E__R

（6a）の文も自然な解釈としてはジョンが仕事場を出るのが午後3時以前になるので，この文の時制は（6b）のようになる：

(6)　a.　At 3 P.M., John had left the office.
　　b. E__R__S

このようにRは完了時制の場合にEと異なった位置を占めることでその存在が明示される。

英語にはSとRとの関係で一次的時制（primary tense）を表し，RとEとの関係で二次的時制（secondary tense）すなわち完了・非完了相の対立を表すのに対して，日本語には時制が存在しないことから，Rが存在せず，Sが直接Eと関連づけられることになる。言い換えれば，英語には過去・非過去の時制の対立と，完了・未完了の相の対立があるのに対し，日本語には時制の対立がなく，相の対立だけがある，ということになる。太田（1977）は，このような分析に基づいて，日本語を母語とする英語学習者にとって以下のような点が困難であるとの予測を行っている。

(7)　a. 英語の現在形と未来形の区別
　　b. 英語の過去形と完了形の区別
　　c. 日本語では「ている」が現在の状態，進行相，完了相，結果相などを表すため，英語の単純現在形，進行形，完了形相互の混同が起きやすい。

（7a）の困難点が元となって過剰一般化が起こった結果(8)のような誤用が起こるとしている：

(8) a. *If you (will) explain it, he surely *understands* it.
　　b. *Some day he surely *becomes* a fine player.
　　c. *Some day, he *is* loved by everybody.
　　d. *It *is* cold tomorrow.

太田（1977: 239）

（8）の例はいずれも，日本語であれば「ル」形に対応するため，英語でも，正しい未来形の形ではなく，単純現在形の形にしてしまう誤りである。(7b)が原因となった誤りの例は（9）のようなものである：

(9) a. *She *was* a student for the last few years.

b. *She *was* sick for two years by then.

太田 (1977: 239)

日本語では過去形と過去完了形の区別が存在しないため，英語における副詞との共起関係からその違いを説明することが多いが，それでも(9)のような誤りが多いことは多くの英語教員が実感しているところだと思われる。(7c)に起因する誤用は「ている」が対応する概念領域が広いため，いくつかのタイプになって出現する。その一部を挙げたのが（10）である：

(10) a. *John *is departing*. (for 'John has departed.')

b. *He *is visiting* Japan in 1921. (for 'He visited Japan in 1921.')

c. * John *is resembling* his father./* John *is belonging* to this club.

d. *The train *has been arriving*. (for 'The train has arrived.')

e. *He *has written* the letter for two hours.

太田 (1977: 240-241)

(10a)は完了形を用いるべきところに進行形を用いることによる誤り，(10b) は過去時制を用いるべきところに現在進行形を用いる誤り，(10c) はresemble やbelong が状態動詞で，進行形にしなくとも継続を表せるのにもかかわらず進行形にしてしまう誤り，(10d) は現在完了形を用いるべきところに現在完了進行形を用いてしまう誤り，そして (10e) は逆に，現在完了進行形を用いるべきところに現在完了形を用いる誤りである。

太田 (1977)は，これらの仮説が妥当であるかを，高校生に和文英訳問題を課して検証しており，「過度の一般化」による誤りの予測がかなり当たっていると結論づけている。守屋 (2012) でも，このような体系性の違いが日本語母語話者の英語の習得に影響を与えていることを示した。

本節では，音・語彙的意味・文法の領域で見られる英語の体系性の例を，日本語と対照しながら示し，構造言語学的な特徴づけが十分に有効であり，かつ外国語学習や指導に示唆をあたえることができることを示した。

## 5．まとめ

本論文は，構造言語学の「言語は対立関係にある記号の体系からなる」という考え方を取り上げ，これがオーラル・アプローチの批判とともに否定されてしまったわけではないこと，そしてこの考え方が音・語彙的意味・文法の領域で有効であり，かつ外国語学習や指導にも示唆をあたえることができることを示した。

人間言語の本質を追求する営みとしての言語学ではそのパラダイムがシフトしていくことは避けられないが，その課程で積み上げられた知見がすべて無効になるとは限らない。構造言語学の考え方の中にはいまでも有効なものが含まれている。パターンの対立という概念自体が，言語の性質を捉えるのに有効であるとすれば，パターン・プラクティスなどの指導法もそれ自体が的を外れているというわけではないということになる。

コミュニケーションを中心に置きながら文法事項をいかに取り扱うかということがフォーカス・オン・フォームのような考え方の中心になっていると思うが，フォーカス・オン・フォームのような考え方をすることが必ずしもパターン・プラクティスのような体系性を身につけさせる指導と矛盾することはないのではないだろうか。

## 注

1. オーラル・アプローチは文献によってはオーディオリンガル・メソッドと呼ばれることが

ある。後者の用語は欧米で用いられており，前者は主に日本で使われている（佐野 1995: 59）。「アプローチ」は，指導上の手順(procedure)を特定のものに制限する意味に用いられる ‘method’を避けるために選ばれた用語であり（Fries 1959:16），オーディオリンガル・メソッドを取り上げる文献では教材の配列などに言及しているものはあまり見られないという違いがあるが，本稿ではこれらの用語は同じものを指すとして扱う。

**参考文献**


安藤貞夫. 1985.『英語の論理・日本語の論理』東京：大修館書店

Chomsky, Noam. 1959. “A Review of B. F. Skinner’s Verbal Behavior”, *Language*, 35, Vol. 1, 26-58.

Chomsky, Noam. 1964. *Current Issues in Linguistic Theory*.

語学教育研究所編. 1998.『英語指導技術再検討』東京：大修館書店

伊藤健三. 1982. 「言語観と英語教育」　伊藤健三，島岡丘，村田雄三郎著『英語学と英語教育』8-149, 東京：大修館書店

井上聡. 2017. 「技能統合型の授業におけるパターン・プラクティスの効果―習熟度と動機づけの観点から―」『中国地区英語教育学会研究紀要』 47, 33-42.

和泉伸一. 2009. 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京：大修館書店

金田一春彦. 1976. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」　金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, 27-61. 東京：麦書房

國廣哲弥. 1981. 「語彙の構造の比較」　国廣哲弥編『日英語比較講座第３巻　意味と語彙』, 15-52,　東京：大修館書店

久野暲. 1978.『談話の文法』東京：大修館書店

守屋哲治. 2012. 「日英語時制体系の対照言語学的研究：英語学習者の誤用の傾向を踏まえて」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』4 号, 85-95.

守屋哲治. 2021. 「実践力を支える知識体系」石川県教員総合研修センター編『令和２年度金沢大学連携講座の成果』, 28.

太田朗. 1977. 「日英語の比較－時制と相について」,『英語学と英語教育をめぐって』, 211-252, 東京：ELEC.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik eds. 1985 . *Comprehensive Gramma of English Language*. London: Longman.

Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.

Richards, Jack C. and Theodore S. Rodgers. 2014. *Approaches and Methods in Language Teaching Third Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

齋藤栄二. 2015. 『「英語で授業」ここがポイント』. 東京：大修館書店

佐野富士子. 1995, 「The Oral Approach（オーラル・アプローチ」　田崎清忠編『現代英語教授法総覧』, 59-69, 東京：大修館書店

ソシュール，フェルディナン・ド. 1972.『一般言語学講義』小林英夫訳. 東京：岩波書店

Skinner, B. Frederic. 1957. *Verbal Behavior*. New York ： Appleton-Century-Crofts.

寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味第二巻』東京：くろしお出版